

# 京都部落問題 研究資料センター通信

## 第2号

発行日 2006年1月25日 (年4回発行) 編集・発行 京都部落問題研究資料センター

### 報告

### 部落史連続講座

### 近代京都の被差別部落II

二〇〇二年より当資料センターが主催してきました「部落史連続講座」は、好評のうちに四年目を迎えました。本年度は昨年度に続き、「近代京都の被差別部落」をテーマに四回にわたって開催し、毎回、三十名を超える方々が熱心に受講されました。今号では第一回と第二回の講座報告を掲載いたします。

#### 第一回

#### 京都被差別地域の幕末維新

講師 辻ミチ子さん

(元京都文化短期大学)

第一回は一〇月二二日に開催し、『京都の部落史』第一巻及び第二巻の近世・近代部分を執筆された辻ミチ子さんに、「京都被差別地域の幕末維新」と題して講演していただきました。名著『転生の都市・京都』（阿吽社刊、一九九九年）

の執筆者でもある辻さんの研究のキーワードは、「京都」「学校」「部落」「女性」といわれていますが、さすがにその言葉通り、お話は、幕末の明治維新への激動の時代に生きた被差別民衆がすぐそこで、息づいているように思えるほどダイナミックでした。

冒頭まず、辻さんは、「これまで、部落問題といえはいわゆる『穢多』といわれた人々の地域が中心であったが、都市の中に大量に住んでいた非人の問題をぬきにすることはできない」と語り出されました。そして、まず取り上げられたのは、「大仏前の坂本龍馬」という話題でした。

大仏前とは、いまの国立博物館近辺にあった非人小屋。当時の京都に、いくつかがあった非人小屋には、各地から流れてきたいわゆる「無宿者」が多数集まってくる場所でした。地方で食い詰めて職を

求めてやってきた人、一旗揚げようとしてやってきた人、そして、「勤王の志士」と呼ばれた浪人たち、そんな人たちが、隠れ住むにも格好の場所、それが非人小屋でした。実は、その中で、坂本龍馬とお龍さんとの出会いもあったのだと、お話は進みました。お龍さんの父親は長州藩の医者でしたが、亡くなった後は、母親がこの大仏前で飯炊きをしながら暮らしていました。そこで、龍馬との出会いがあり、その後、お龍さんが勤めた旅籠が、あの寺田屋でした。

辻さんのお話は、そうした非人小屋にいた人たちが演じた辻芸のことに続いていきました。『京都の部落史』の中にも紹介されていますが、中島棕隠の『都繁昌記』には、当時の京都の町で、非人たちがいきいきと演じる辻芸の様子が詳細に叙述されています。もちろん、彼らは非人頭の支配の元におかれていたわけですが、その演じる芸の見事さに惹かれ、自らも演じたい、役者になりたいと商人の息子や神主の弟が、その中に身を投じた例も記録されているとのこと。そのひとつである『翁草』には、「やっていることは卑しいといわれることでも、志は君子の

ようだ」と書かれているそうです。このように実は、非人と呼ばれた人たちの中には、身分制を乗り越え、自由闊達に活動する人たちがいたのであり、非人小屋はそうした人たちの拠点でもあったといえます。幕府は、天保の改革で取り締まりのお触をたびたび出しますが、そうした動きをくい止めることはできません。その例として、辻さんは、「三条寺裏の松竹兄弟」を上げられました。祖父が三条寺裏の非人小屋に住んでいた薩摩藩の武士といわれ、近代に入って芸能に関わる巨大な会社の創始者となる「松次郎」と「竹次郎」、彼らを筆頭に、非人小屋からは、明治期の名優が多数輩出されていたといえます。

こうした身分制を乗り越える人々の動きの中で、「明治維新」を迎えます。辻さんは、明治維新以降の部落のリーダーであった益井元右衛門、桜田儀兵衛、竹中庄右衛門を紹介されました。彼らは、解放令の前後から、差別的撤廃を求める動きをはじめ、特に教育と殖産興業に力を注ぎます。例えば、蓮台野村の元右衛門とその息子の茂平は、「学問のすすめ」が言われる中、蓮台野小学校（現樂只小学校）を設立していきます。明治六年四月八日、男五〇人、女二二人が入学して開かれた開校式には、なんとその九倍にあたる六五〇人の人々が参観にきたといえます。こうした人々の姿を語られた辻さんは、解放令後の部落問題を考える時、「非人と呼ばれる人たちがこんな一生懸命おしろいぬって踊っていたやないか、部落の人がこんなに頑張って学校を建てたやないかと、それだけではなくて、町衆の人たちとどういう交流をしていたのか、それとともに、富国強兵・資本主義の道をまっしぐらに進んだ国の政策をどう捉えていくのか、そういう政策と部落の人々の生活がどう関わったのか」ということを調べていっていただきたいと思えます。差別というのは自分があつて誰かがあつて、そこで起こるものです。自分は、どう考えるかということに大事にしていただきたいと思えます」と最後に語られて、お話を終えられました。

時代を変化させていくのは、自由をもとめて動く人々であること、さらに、その力をまとめ上げていくのは、変化していく時代の先を見通して、自分の生活の場で、自分にできることを着実に進めていく人々であること、幕末維新のころ、京都の被差別地域の中で、そうして生きた人々の姿は、私たちに、改めて「主体的に生きることの意味」を問いかけてきたように思えました。

（運営委員 外川正明）

第二回

近代の公衆衛生と部落問題

講師 小林文広さん

（京都市歴史資料館）

第二回目の講座は、一月一日、京都市歴史資料館の小林文広さんに『近代の公衆衛生と部落問題』と題して講演していただきました。講演要旨は以下のとおりです。

京都では、明治一〇年以降コレラがしばしば発生し、多数の死者を出しました。当初、行政の対策としては発生地域の交通遮断と消毒、患者の隔離しか方法がなく、発生地区は裏借家の多い人家の密集した地域から次第に市内全地域に広がっていきました。しかし京都市内の「被差別部落」で発生した事実はありませんでした。ところが明治一五年の八幡の被

差別部落でのコレラ騒動―京都最大のコレラ騒動で、詳しいコレラに関する情報が届かなかつたことや医者・警察・戸長などへの不信などがかさなり、患者の家族や地区住民たちが警察を襲撃した事件―などをとおして「部落は危険地域だ」とみなされるようになり、発生源と危険視されるようになります。具体的にはコレラ防止策として、市内から貧困者の利用する木賃宿を排除するため営業許可区域を定



めた「宿屋取締規則」（一八八六年）を施行したのにつづき、地域をあらかじめ指定し、強制的に消毒などを行う「消毒的清潔法」（一八九〇年）では市内の被差別部落も対象地域とされ、常に監視される体制がとられるなかで市民の間にも危険地域としての部落観がつくられていったのです。また、これらの条例がだされるなかで、貧しい人々が市内から排除され、当時「貧民部落」と呼ばれた地域が京都市周辺にできていくことになりました。これらの事実を、一八七七年コレラ流行時の患者分布図や一八八六年の学区別コレラ患者数一覧、京都市域における木賃宿営業許可地域の変遷図などの仔細な地図資料・統計をつかって丁寧に説明していただきました。極めて示唆に富む話で学ぶところが多かったのですが、少し専門的でもあって活発な意見交換までには至りませんでした。しかし受講者には見識を深める貴重な講座でした。

なお、これらの内容については小林さんの著書『近代日本と公衆衛生 都市社会史の試み』（雄山閣出版、二〇〇一年）に詳しく書かれていますのでご参照下さい。

（運営委員 金森襄作）

## 本の紹介

### 三上敦史著

## 『近代日本の』

### 夜間中学』

金森襄作

「学制」と「教育令」を基とする戦前の日本の教育は、「大学」と「小学」を中心に発展してきた。前者は高級官僚や高級技術者を育成する帝国大学を中心とした高等教育機関を、後者は工業化に対応できる良質な労働者を育てる義務教育機関をさす。この中間に位置する中等教育は、大学進学のための中学校・高等学校のエリートコースと、国民教育ともいわれた実業補習学校・各種学校との二つのコースに分かれていた。産業革命に続く大戦景気で日本資本主義は急速に発展し、多くの中等教育卒業者を必要とし、またこの志願者数も激増していった。この現状に対して文部省は抜本的な中等教育機関の見直しは図らず、既成の教育機関の量的拡大（定員増）だけで対処しようとしていった。これでは昼

間働きながらより上級の教育を受けたいと切望する多くの勤労青年達の進学は不可能であるばかりか、中等教育卒業者も不足していった。そこで、道・府・県や各地の教育者たちや私学などが中心となつて、数百もの夜間中学を県庁所在地などの都市部中心に次々と設立していったのであるが、文部省は弾圧まではしないものの、支援をしないまま黙認の形で放置しつづけて、後日、その一部だけを中学位の教育を行う『準中学校化』（専検指定校⇨高等学校進学資格付与・筆者註）したに止まった。今日までの教育史研究は初等あるいは高等教育を対象に行い、中等教育史研究をほとんど等閑視し、とりわけこの夜間中学に対しては、わずか数名が準中学校化した学校に限定して研究したにすぎない。このように夜間中学を等閑視し、あるいは言及しても準中学だけを取り扱う姿勢は、「帝国大学至上主義」（同書三五六頁）ではないか、準中学校化しなかった学校も私学の各種夜学も、鉄道教習所や通信講習所、あるいは青年学校も含め、当時設立された全ての夜間中学全体を網

羅して考察すべきだと考えた三上氏は、少ない残存資料を全国的に集め研究して、出版されたのが本書『近代日本の夜間中学』である。だが具体的研究は従来と同様、主として「準中学校化」した夜間中学を中心に行われ、私学が設立した各種夜学や鉄道教習所・通信講習所・青年学校などの説明は不十分で今後の課題として残されている。しかし氏の努力の結果として、戦前の夜間中学校史全体の体系化が本書によって初めて達成できたことは間違いでなく、教育史に関心のある人、教師などはぜひとも一読されたい。教育史に慣れない私も、多いに見識がひろがったように思える。ただあえて所感を述べれば、次のようになる。たしかに多数の夜間中学の設立は、社会教育の拡大であり、三上氏の主張どおり肯定的に評価されよう。しかしそれが果たした歴史的作用をみるとき否定的側面もあったことと見逃してはならないというところである。

夜間中学に進学した多くが「小上昇」「ささやかな立身出世」「クールアウト」者にすぎなかつ

たと除外し、「準中学化」した学校だけを取りあつた従来の研究者の姿勢は、「帝国大学至上主義」的だったどうかは別問題にして間違つた見方であり、三上氏の

いうように全体的考察はおこなわれるべきで、その体系化はぜひとも必要であろう。しかし勤労青年の学び場の増大がもたらした否定的側面も間違ひなくあつたということである。氏の言葉を借りていえば、夜間中学卒業者の大半が「中卒者の待遇を受けることで満足」したという問題である。初等学校卒業では絶対に就けない判任官（現在の初級公務員）や銀行員・会社事務員などの職種に、夜間中学を卒業さえすれば中学卒業の資格がなくとも同等に就くことができ、大半の者がその地位にあまんじ、そこで満足し安住していったという問題である。それは長時間・低賃金の劣悪な初等教育出身者の職種と比較にならない程安定した中産階層の生活だったからである。う。いふなれば当時の夜間中学は、まさに小学卒業者にとつて唯一「小上昇」「ささやかな立身」「クールアウト」を図ることので

きる機能をしっかりと持っていたからであつた。

本書に従えば、「今の世の中は学問の世の中である。学問が出来なければいくら高貴のお歴々でも物の役に立たない。と同時に、たとへ百姓漁夫の家に生れても、学問さへあれば立身出世は思ふがままである」（本書八四頁）。これは当時の百姓漁夫にとつて、大学進学なんて当初から望みえない事柄で、中等教育有無こそが自らの一生を左右する関心事だつたということだつたのである。親が貧困であつても必死になつて人一倍努力すれば、夜間中学なら自分の力でいける。そして卒業さえすれば安定した生活は保障される、それが故に卒業をもつて「満足」し、中流の階層の世界で努力し、そこで一生を送つたということになる。とするならこの事実は、夜間中学はまさに客観的には信愛中等夜学校を設立した有島頼寧の狙いどおり、「学校を通して上下階級の融和を図る」、あるいは善良なる労働組合の指導者育成をめざす場とする、という歴史的役割をみごとに果たしたといわざるをえない。否、中

産階層の生活に「満足」した者にとつて労働運動への参加自体考えなかつたという方が正確だったかもしれない。ともあれ社会順応型人間の教育機関に夜間中学がなつたことは疑う余地がない。三上氏は夜間中学の創設を、勤労青年の学び場の拡大として肯定的側面の強調はされているが、このような否定的側面の追究をほとんどおこなつておられない。しかし新たに形成されていった中間層に夜間中学卒業者の大半が加わり、そこで満足し安住していったことは、彼らも、一九二〇年代・一九三〇年代前半には日本資本主義発展を下から支えていく要因になつたばかりでなく、後日には忠実な皇国臣民の兵士としてアジア侵略の担い手にもなつていったとも考えられるのであるが、これらに対する研究もぜひとも必要ではなからうか。三上氏が社会教育の場として肯定的にみておられる青年学校も、明らかに帝國的主義的人格の養成機関であつて、否定的な側面の方が大きかつたと私には思えるのだが。とするならば、今後夜間中学でどのような教育がなされたか、単な

るカリキュラム研究にとどまらず、人格形成に大きく作用した思想的教育の内実、卒業後の就業内実、戦争加担実感など、その教育の内実的研究の深化がぜひとも必要となる。そしてこの教育の中で培われた人生観・社会観・世界観などがどのようなものであつたのか、解明していく必要がある。また自らに参加したアジア侵略に対する考え方、敗戦後での実感なども併せ行つてほしいものである。これらに関する率直な所感や手記はすくないだろうが、ただまだ生存者はいる。早急なインタビューやアンケート実施などが望まれる。これらが行なわれてこそ夜間中学に対する歴史的評価が可能となるのではなからうか。

戦後の夜間高校設立問題と戦前の夜間中学問題とは氏の予想のようには直結すまい。また現在消滅の危機に直面している夜間高校問題も同様である。しかし拡大しすぎた高等学校や大学教育が如何にあるべきかを考えていく上で、夜間中学の評価問題は大きくかわるように思える。

（北海道大学図書刊行会刊、二〇〇五年）

.10) : 1,000円

特集 結婚差別の現状と啓発

結婚差別問題の多様な現実と啓発の課題 中村清二／結婚と部落差別—通婚と結婚差別の趨勢— 内田龍史／結婚差別にみる複合差別—部落外出身女性にとっての結婚差別— 齋藤直子

広島三菱重工元徴用工在韓被爆者訴訟・広島高裁判決の意義 在間秀和

新たな段階を迎えた労働者の個人情報保護 竹地潔

前近代における癩者の存在形態について 上 宮前千雅子 書評

柴山恵美子・中曽根佐織編著『EUの男女均等政策』『EU男女均等法・判例集』 谷口真由美／部落解放・人権研究所『排除される若者たち フリーターと不平等の再生産』 青木紀／青木紀編著『現代日本の「見えない」貧困 生活保護受給母子世帯の現実』 杉本貴代栄

**部落解放研究 167号** (部落解放・人権研究所刊, 2005.12) : 1,000円

特集 差別撤廃と国内人権機関

差別撤廃における国内人権機関の役割 山崎公士／韓国の国家人権委員会と差別撤廃 金東勲／サイバースペースにおける人種主義および排外主義と闘う—ヘイトスピーチに影響する法的問題および国際協力を促進する方法— 上 アニー・カイル／中原美香 (翻訳)

地域と協働する学校づくりからキャリア教育の構築へ—池田市立細河中学校の取り組み— 丹松美代志

前近代における癩者の存在形態について 下 宮前千雅子 大阪府内の識字・日本語教室における学習の諸相と今後の課題 福島和子

書評

村上正直著『人種差別撤廃条約と日本』 申恵■ (シン・ヘボン) / 松下志朗著『近世九州の差別と周縁民衆』 中尾健次

**部落解放研究くまもと 50号** (熊本県部落解放研究会刊, 2005.10)

特集 差別の諸相—水俣病、ハンセン病、在日韓国・朝鮮人—

水俣の負の遺産とその展望：50年後の水俣病事件 花田昌宣／「在日を生きる」と「ハンセン病を生きる」のあいだで—在日コリアンのハンセン病当事者として生きるということ— 天田城介／何が平等な関係を妨げているのか (在日問題を中心に) —自分史と年金問題から見えてくるもの— 李幸宏

身分と身形—衣服統制を中心に— 第24回九州地区部落解放史研究集会報告 樋口輝幸

れきし・くらし・ひと 20 部落史古文書研究会

**部落解放史ふくおか 119号** (福岡県人権研究所刊, 2005.9) : 1,050円

特集 企業の社会的責任と人権

企業の社会的責任 (CSR) と人権 谷本寛治／人権三K (きれいごと、堅苦しい、暗い) なんて言わせない 稲積謙次郎／企業と人権—過去・現在・未来 原田憲正 隠された風景 福岡賢正

にんげん・羽音豊 3 羽音豊調査研究プロジェクト

書評 『帰国運動とは何だったのか—封印された日朝関係史』 (高崎宗司・朴正鎮編著) 桐原健司

ビデオ評 『ヨーロッパ・ヨーロッパ—僕を愛したふたつの国』 (アニエスカ・ホランド監督、1990年、フランス・ドイツ) 割礼とダビデの星 船津建

**部落解放なら 23** (奈良人権・部落解放研究所刊, 2005.3) : 1,100円

シンポジウム記録 人権のまちづくりへの提言—認め合い、つながり合い、支え合う社会をめざして— 講演録 人が大事!世界は二の次? 吉岡忍

史料紹介 近江博労の大和国内での活動を伝える文書 吉田栄治郎

**部落解放ひろしま 78号** (部落解放同盟広島県連合会刊, 2006.1) : 1,000円

特集 浮き彫りになった差別実態

福山市同和地区実態調査結果を分析する 川崎卓志／「呉市連続・大量差別紙片事件」の経過 得田正明／行政書士戸籍謄本等不正取得事件 島田健吉, 福山市市民課

解放運動の人間像 21 同和教育、人間を見据えたもの 小森龍邦

府中市隣保館廃止無効確認・損害賠償訴訟の意義 小森龍邦

**もやい 長崎人権・学 50号** (長崎人権研究所刊, 2005.10) : 700円

特集 身分と身形—衣服統制を中心に

講演 つくりかえられる徴—日本近代・被差別部落・マイノリティー 黒川みどり

**ルシファー 8** (水平社博物館刊, 2005.10) : 500円

ある「フェミニスト」から見た企画展「差別に生きた女性たち」 松村徳子

「差別に生きた女性たち」を開催して 守安敏司

「戦争の中の水平社運動」を開催して 仲林弘次

公開講座報告 「差別に生きた女性たち」— (奈良) 近・現代を問い直す— 大林美亀

特集 戸籍・住民票を非公開に

興信所と行政書士の結託による戸籍謄本等の大量不正取得事件 東田寿啓／戸籍謄本の不正取得は許さない 京都で起きた結婚差別事件と身元調査撤廃にむけた課題 部落解放同盟京都府連合会糾弾闘争本部／個人情報保護に反する戸籍公開制度 佐藤文明

差別の精神史 28 差別のフォークロア 東日本編 1 赤坂憲雄

本の紹介 『水平記 松本治一郎と部落解放運動の百年』（高山文彦著）竹森健二郎

見なされる差別考 1 部落出身者の登場しない部落差別の現実 奥田均

「行動する人権教育」を学生はどのように実践したか 部落問題を正面に据えたインタビューの取り組み 下橋邦彦

インタビュー 日本政府は、軍性奴隷制への明確な謝罪と賠償を 李容洙

差別の歴史を考える 13 近世「賤民」制の形成 ひろたまさき

**部落解放 557号**（解放出版社刊，2005.11）：630円

特集 冤罪はなぜ起こるのか

対談 冤罪の構造を考える 庭山英雄，浜田寿美男，笠松明広／取り調べの密室化がえん罪の温床 取り調べ録音録画制度の提案を検討する 指宿信／全面証拠開示は冤罪防止に不可欠 秋山賢三／再審は何のためにあるのか 横浜事件再審開始決定を契機として 森井暉

差別の精神史 29 差別のフォークロア 東日本編 2 赤坂憲雄

本の紹介

『木下川地区のあゆみ 戦後編 皮革業者たちと油脂業者たち』（木下川沿革史研究会編）／『カウンセラー良子さんの幼い子のくらしとこころQ&A』（内田良子著）／『子どもと偏見』（フランシス・アブード著）／『夜間中学の在日外国人』（宗景正写真・文）／『＜ワンコリア＞風雲録 在日コリアンたちの挑戦』（鄭甲寿著）／『朝鮮高校の青春 ボクたちが暴力的だったわけ』（金漢一著）

対談 生き抜け、その日のために。 松本治一郎生誕百年と『水平記』 高山文彦，松本龍，朝治武

ハリケーン・カトリーナとブッシュ政権 貧困と人種差別への闘いの必要性を示す 柏木宏

差別の歴史を考える 14 いろいろな差別 ひろたまさき

見なされる差別考 2 データで考える「部落出身者とはだれか」 奥田均

**部落解放 558号**（解放出版社刊，2005.12）：630円

特集 博物館と教育・啓発

差別の精神史 30 差別のフォークロア 東日本編 3 赤坂憲雄

本の紹介

『壁をたたき音がきこえる ハンセン病患者冤罪処刑藤本事件に再審・無罪を』／『人類館 封印された扉』（演劇「人類館」上演を実現させたい会編）／『世界の女性労働』（柴山恵美子，藤井治枝，守屋貴司編著）／『沖縄「戦後」ゼロ年』（目取真俊著）／『「9条」変えるか変えないか 憲法改正・国民投票のルールブック』（今井一編著）／『フィンランドに学ぶ教育と学力』（庄井良信，中嶋博編著）

ウトロー国民の歴史の外で 中村一成

差別の歴史を考える 15 差別へのあらい ひろたまさき

部落解放運動で目覚めた私 ハンセン病患者の息子として父を誇りに生きる 林力

見なされる差別考 3 属人的差別から属地的差別へ 奥田均

**部落解放 559号**（解放出版社刊，2006.1）：630円

特集 差別文書事件の闇にせまる

「連続・大量差別はがき事件」が私に突きつけたもの 浦本誉至史／「連続・大量差別はがき事件」の犯人Sさんへ「もう一人の私」への手紙 白井俊一／対談 その根深きもの 人間の闇に潜む差別意識と対峙して 太田明，志村康／犯人を生み出したものの正体 「ホープレス」な社会状況が生んだ荒廃 斎藤貴男

「反戦」とエンターテインメント 表智之

差別の精神史 31 差別のフォークロア 東日本編 4 赤坂憲雄

本の紹介

『脱イデオロギーの部落史 呪縛が解けて歴史が見える…』（塩見鮮一郎著）／『痛憤の現場を歩く』（鎌田慧著）／『人権教育のための世界プログラム』（平沢安政著）／『問い直す差別の歴史 ヨーロッパ・朝鮮賤民の世界』（小松克己著）／『言論統制列島 誰もいわなかった右翼と左翼』（鈴木邦男・斎藤貴男・森達也著）／『憲法を変えて戦争へ行こう という世の中にしないための18人の発言』

いまも生きている「部落地名総鑑」 発覚30年を迎えて 北口末広

見なされる差別考 4 忌避する論理 1 奥田均

差別の歴史を考える 16 近世における平等思想 ひろたまさき

**部落解放研究 166号**（部落解放・人権研究所刊，2005.

朝倉重吉は大変な読書家だった—朝倉資料覚書 2— 川向秀武  
**月刊地域と人権 261** (全国地域人権運動総連合刊, 2005.10) : 350円  
 人権擁護法案の再提案反対・廃案に向けた闘いの到達点と課題 新井直樹  
**月刊地域と人権 262** (全国地域人権運動総連合刊, 2005.11) : 350円  
 三重の不公正な行政・教育の実態と弓矢人権裁判勝利に向けて 石塚徹  
**月刊地域と人権 263** (全国地域人権運動総連合刊, 2005.12) : 350円  
 新中学校教科書の部落問題記述を批判する 上 小牧薫  
 『同和はこわい考』通信 168 (藤田敬一刊, 2005.10)  
 大きな思想史の流れに位置づける 黒川みどり  
 再録 第32回奈良県部落解放研究集会から  
**ねっとわーく京都 203** (ねっとわーく京都21刊, 2005.12) : 500円  
 市政レポート 京都市、「快挙」達成なるか!?!—薬物逮捕職員、今年はまだゼロ 寺園敦史  
 ウォッチャーレポート23 不法占有と糾弾幻想 馬野一  
**反差別人権研究みえ 4号** (反差別人権研究所みえ刊, 2005.9)  
 分けられることで失うものは何だろうか—学校教育の再編にみられる分離教育— 荒川哲郎  
 このまちでありのまま生きたい 荒川哲郎  
 四日市公害問題の教訓と国際環境協力—韓国産業団地における公害問題の実態— 朴恵淑  
 四日市公害を聴く—四日市公害病認定患者・関係者の証言— 朴恵淑  
 参加型人権教育の手法についての考察 児玉克哉  
 外国人の子どもの言語権・学習権をどう表現するか—子どもの読む力を育てる— 岡崎敏雄  
 外国籍子ども教育研究会 公開講座アンケートの報告 森由紀  
 伊勢国の芸能の民「ささら」 和田勉  
**ヒューマンライツ 211** (部落解放・人権研究所刊, 2005.10) : 525円  
 連続大量差別ハガキ事件とハンセン病元患者宿泊拒否事件 志村康, 浦本誉至史  
 戦後60年—部落解放の歩み— 5 長野県連の書記長として 中山英一  
 現代史の目 48 終戦の日とアジア諸国 小山仁示  
 未来への証言 検証・ハンセン病隔離の歴史 第2部 13 皇太后の大阪行啓と大和川 養育院「回春病室」が隔離

の原点 つむらあつこ  
**ヒューマンライツ 212** (部落解放・人権研究所刊, 2005.11) : 525円  
 鳥取県「人権救済条例」制定の意義と今後の課題 友永健三  
 連載 走りながら考える 鳥取県人権侵害救済推進条例が成立 積極面・消極面を考える 北口末広  
 啓発ビデオを使った人権学習 上 『「私」のない私〜同調と傍観』 武本勝  
 書評  
 内田良子著『カウンセラー良子さんの幼い子のくらしとこころ Q&A』 玉置章子/岡本雅享監修・編著『日本の民族差別〜人種差別撤廃条約からみた課題』 師岡康子  
**ヒューマンライツ 213** (部落解放・人権研究所刊, 2005.12) : 525円  
 大阪人権博物館の新たな挑戦 吉村智博  
 差別事件の刑事裁判について 現行法は差別事件に対応できているか 内田博文  
 走りながら考える 戸籍不正入手事件の示すもの—20年前と変わっていない現実— 北口末広  
 大阪における私立高校での人権教育のとりくみの現状と課題 二宮敬  
 ジェンダーの視点でニート問題を考える 金谷千慧子  
**ひょうご部落解放 118** (ひょうご部落解放・人権研究所刊, 2005.9) : 700円  
 特集 潜在する「身元調査」  
 興信所と行政書士の結託による戸籍謄本等の大量不正取得事件—部落解放同盟兵庫県連合会の取り組み— 東田寿啓/行政書士らによる戸籍等の違法請求問題について 麻田光広/プライバシーのない国—行政書士不正事件を追う— 角岡伸彦  
 市町村合併に関わる差別ハガキ事件を許すな 今井久雄  
 中国残留日本人孤児—今に続く棄民政策— 吉田哲也  
 祖国と日本のはざままで 林同春  
 映画の紹介 「Ray/レイ」 (テイラー・ハックフォード監督, アメリカ, 2004年) 松本創  
 本の紹介  
 『歴史の中の在日』 (藤原書店編集部編) / 『水平記 松本治一郎と部落解放運動の100年』 (高山文彦著)  
 資料紹介 住民基本台帳の閲覧等の制限問題に関して 解題・兵藤宏  
**部落解放 555号** (解放出版社刊, 2005.9) : 1,050円  
 部落史ゆかりの地  
**部落解放 556号** (解放出版社刊, 2005.10) : 630円

月刊滋賀の部落 目次 354号～385号

**月刊滋賀の部落 385** (滋賀県同和問題研究所刊, 2005.12) : 400円

青年の就労の難しさ—自身と社会の問題— 那須光章

高校における進路保障の現状と課題 福岡恭裕

**しこく部落史 第6号** (四国部落史研究協議会刊, 2004.8) : 1,000円

「喜田貞吉の世界—多様な被差別民—」論文

香川における「サンカ」考—「高知のサンガイ」の記事をもとに— 山下隆章／『民族と歴史』を通してみた土佐の被差別民衆 黒岩伸安／宿神を奉じる民 水本正人／上甲米太郎の共生思想と実践—民族を越えた教育者— 五藤孝人／阿波の三番叟まわし—徳島県西部の門付け記録から— 南公代・中内正子・酒井理恵／喜田貞吉をどうとらえるか—2004年夏 部落史公開フォーラム「喜田貞吉の世界」によせて— 増田智一

記録 高松結婚差別闘争70周年講演会 浜近仁史

人物紹介

岡崎精郎—透徹した人道主義者— 吉田文茂／木村和蔵—被差別部落の教育と生活改善に生命をかけて取り組んだ— 武知忠義

**しこく部落史 第7号** (四国部落史研究協議会刊, 2005.8) : 1,000円

喜田貞吉と部落問題 吉田栄治郎

「西讃暴動」における部落襲撃と救恤—近世から近代への狭間で— 山下隆章

『大変記』による土佐における「解放令」の考察 宇賀平

行動する人道主義者岡崎精郎の誕生をめぐって—1920年代を中心に— 吉田文茂

「ちょんがり」の精神史—運動と歌との相関関係を探る— 五藤孝人

土佐藩政期に見る被差別部落 井澤武大

**社会科学 75** (同志社大学人文科学研究所刊, 2005.9) : 1,000円

インタビュー 野中広務「私の『園部時代』」 聞き手・解説 庄司俊作

**人権21 調査と研究 178** (岡山人権問題研究所刊, 2005.10) : 650円

特集 若者の就職保障

**人権21 調査と研究 179** (岡山人権問題研究所刊, 2005.12) : 650円

特集 高齢者による第三セクターづくり

**人権と社会 第1号** (岡山人権問題研究所刊, 2005.10) : 1,000円

支援活動を通じて考える、「未公認」知的障害者の権利擁護 福田勉

成人教育学の視点からみた人権啓発の歩みと展望—岡山県吉井町を事例として— 小出隆司

識字と人権—人間の多様性からみた文学文化 あべやすし

プライベートな領域の画定とプラグマティック・アプローチ 小林直三

グローバリゼーションと人権の普遍性 伊藤恭彦

延安の光と影—陳永發『延安の陰影』を読む— 岩間一雄

書評

脇田晴子著『日本中世被差別民の研究』—「中世被差別民の成立」論を中心に— 菅木一成／岩間一雄編『三好伊平次思想史的研究』を読む—部落改善・融和運動指導者についての初の本格的な総合的研究書— 成澤榮壽

**人権と部落問題 736** (部落問題研究所刊, 2005.9) : 1,155円

特集 ハンセン病検証会議

野中広務と部落問題 杉之原寿一

2004年度部落問題研究所定期誌総目次

**人権と部落問題 737** (部落問題研究所刊, 2005.10) : 630円

特集 生きる権利2

文芸の散歩道 西郷隆盛と「正成論」—夏目漱石と明治を歩く3— 水川隆夫

差別と向き合うマンガたち 19 二人の外国人画家に描かれた「日本人」—ワーグマンとビゴー— 吉村和真

**人権と部落問題 738** (部落問題研究所刊, 2005.11) : 630円

特集 人権・同和教育研究会のゆくえ

本棚

『いま憲法「改正」と人権を考える』(小林武著)／『わらしべ—生きてきて 今』(中川春子著)

文芸の散歩道 木村毅 「哀話 漂泊の女絵師」 秦重雄

差別と向き合うマンガたち 20 懐かしい貧乏 田中聡

**季刊人権問題 341** (兵庫人権問題研究所刊, 2005.10) : 735円

特集1 アメリカの現状を考える

特集2 教育基本法を生かそう

**信州農村開発史研究所報 93号** (信州農村開発史研究所刊, 2005.9)

天正検地帳にみる諸身分—「てうり」記載など— 森安彦

明治中期・八王子の被差別部落に関する資料 斎藤洋一



支所刊, 2005. 9)

靴の歴史散歩 78 稲川貴

シリーズ姫路革 4 姫路革の呼称を大事に 出口公長

皮革関連統計資料

**関西大学人権問題研究室紀要 51号** (関西大学人権問題研究室刊, 2005. 9)

阪神・淡路大震災と文学・文学者 3—小田実・田中康夫・金時鐘などの表現行為について— 吉田永宏

非典型雇用と障害をもつアメリカ人法 伊藤健市

大坂北組惣代の盗賊方役中の記録について 藤原有和

日本統治期の台湾・朝鮮における「国語」教育 (上)

鳥井克之・熊谷明泰

始まりとしてのナラティブ—世俗批評としての生活史研究 1— 岸政彦

**季節よめぐれ 214号** (京都解放教育研究会刊, 2005. 11)

外国人のいる教室—在日の教師としてのとりくみ— 韓裕治

**京都市政史編さん通信 23号** (京都市市政史編さん委員会刊, 2005. 9)

1918年の市域拡張に関する一史料 松下孝昭

**クロノス 23** (京都橘大学女性歴史文化研究所刊, 2005. 10)

性と生殖をめぐる諸問題 11 生殖革命がもたらす新たな優生思想の影 鎌田明子

**グローブ 43** (世界人権問題研究センター刊, 2005. 10)

釜山の朝鮮通信使ブーム 仲尾宏

春駒と京太郎 斉藤利彦

「無害」で「安全」な言葉をめぐって 本郷浩二

**藝能史研究 170** (藝能史研究会刊, 2005. 7) : 1, 800円

近世における桂女と配札・勸化 村上紀夫

**こべる 151** (こべる刊行会刊, 2005. 10) : 300円

インタビュー 部落解放運動とわたし 1 部落問題から眼

をそらして生きた日々 山下力+藤田敬一

各位の生きざま 野町均

震災なかりせば出会わなかった人々と暮らし 中村大蔵

子どもを大切にすること—スウェーデンの旅から 坂倉加代子

**こべる 152** (こべる刊行会刊, 2005. 11) : 300円

インタビュー 部落解放運動とわたし 2 目覚めから運動

へ、そしていま 山下力+藤田敬一

最近読んだ本から 8 島田洋七著『佐賀のがばいばあちゃん』 坂倉加代子

プロとアマのちがいでについて 高田嘉敬

介護保険は入居老人の旅行を認めない? 中村大蔵

**こべる 153** (こべる刊行会刊, 2005. 12) : 300円

アジアの側から考えると—一日高六郎さんの『戦争のなかで考えたこと ある家族の物語』を読む— 師岡佑行

『同和利権の真相』をめぐる 高田民彦

制服と上履き 中西宏次

**こべる 154** (こべる刊行会刊, 2006. 1) : 300円

人と居場所と癒し—家庭裁判所から少年補導を受託して 中村大蔵

友人がアルカイダ? いざとなるとあたふたした私の人権感覚 次田哲治

私の視点—遺書・軍隊・差別— 安達五男

**在日朝鮮人史研究 35** (緑蔭書房刊, 2005. 10) : 2, 400円

釜山で開かれた「第二回日韓歴史研究者共同学会」に参加して 崔碩義

一九二〇年代の在阪朝鮮人「融和」教育の見直し—済美第四小学校夜間特別学級第二部の事例を通して 塚崎昌之

一九三〇年代・愛知県における朝鮮人の教育運動—朝鮮普成学院 (名古屋普通学校) とその周辺 西秀成

戦前期京都市郊外吉祥院における朝鮮人の流入過程 高野昭雄

勿来地域における「朝鮮人飯場」と戦時労働動員についての調査メモ 龍田光司

石狩炭田での朝鮮人労働について 竹内康人

本願寺札幌別院の朝鮮人「遺骨遺留品整理簿」—内容と若干の考察 白戸仁康

プランゲ文庫所蔵の在日朝鮮人刊行新聞にみる済州四・三認識 1948-1949 村上尚子

教育実践 日韓の歴史と未来への道—「冬のソナタ」から強制労働の学びへ 西村美智子

**月刊滋賀の部落 382** (滋賀県同和问题研究所刊, 2005. 10) : 400円

書評 水谷孝信著『滋賀県学徒勤労働員の記録—あの日銃後も戦場でした—』 苗村和正

戦後同和教育の証言 徳島法融と夜間学習塾—地区の寺院住職・中高教育に貢献— 鈴木俊亮

**月刊滋賀の部落 383** (滋賀県同和问题研究所刊, 2005. 11) : 400円

同和教育の源流 小坂善造と戦前の南野小学校 鈴木俊亮

**月刊滋賀の部落 384** (滋賀県同和问题研究所刊, 2005. 12) : 600円

住民の意識と生活実態—滋賀県・日野町における意識調査— 梅田修

天正19年蘆浦村検地帳について 藤田恒春

# 収集逐次刊行物目次 (2005年10月～12月受入)

～各逐次刊行物の目次の中から部落問題関係のものを中心にピックアップしました～

**大阪の部落史通信 37** (大阪の部落史委員会刊, 2005. 11)

第1巻所収の別添絵図からわかること 大阪の部落史委員会事務局

西郡部落史研究会の近況 森田康夫

図書紹介 東の歴史と生活を掘りおこす会編『新編 嶋村の歴史と生活 第1集・第2集』 井上秀和

初期の改善団体 里上龍平

**岡山部落解放研究所報 270号** (岡山部落解放研究所刊, 2005. 9) : 100円

新刊紹介 高橋哲哉『靖国問題』 好並隆司

**岡山部落解放研究所報 271号** (岡山部落解放研究所刊, 2005. 10) : 100円

「岡山県人権政策推進指針の見直しについて」一答申(案)を読む一

**岡山部落解放研究所報 272号** (岡山部落解放研究所刊, 2005. 11) : 100円

第1回『部落史論争を読み解く』読書会・報告 好並隆司

**岡山部落解放研究所報 273号** (岡山部落解放研究所刊, 2005. 12) : 100円

第2回『部落史論争を読み解く』読書会・報告 荒木弘

**解放教育 456** (解放教育研究所編, 2005. 11) : 730円

特集 外国人教育の現状と課題

元気のもととはつながる仲間 8 生きることが軽んじられる世の中で(後) 外川正明

**解放教育 457** (解放教育研究所編, 2005. 12) : 730円

特集 教室に、世界の教育運動を！—うごき、つながる世界の教育運動

元気のもととはつながる仲間 9 同和教育は終われない—

全同教宮崎大会に寄せて 外川正明

**解放へのはばたき 78** (日本基督教団部落解放センター運営委員会刊, 2005. 11)

特集 「留岡幸助」「賀川豊彦」から問われていること

**語る・かたる・トーク 127** (横浜国際人権センター刊, 2005. 9) : 500円

信州の近世部落の人びと 5 斎藤洋一

同和問題再考 57 革新勢力と部落解放運動(下) 田村正男

部落差別の現実 38 教育と啓発 1 江嶋修作

**語る・かたる・トーク 128** (横浜国際人権センター刊, 2005. 10) : 500円

信州の近世部落の人びと 6 斎藤洋一

同和問題再考 58 「同対審」—その舞台裏 1 田村正男

わたしと部落とハンセン病 1 林力

部落差別の現実 39 教育と啓発 2 江嶋修作

**語る・かたる・トーク 129** (横浜国際人権センター刊, 2005. 11) : 500円

信州の近世部落の人びと 7 斎藤洋一

同和問題再考 59 「同対審」—その舞台裏 2 田村正男

わたしと部落とハンセン病 2 林力

部落差別の現実 40 教育と啓発 3 江嶋修作

**語る・かたる・トーク 130** (横浜国際人権センター刊, 2005. 12) : 500円

信州の近世部落の人びと 8 斎藤洋一

同和問題再考 60 「同対審」—その舞台裏 3 田村正男

わたしと部落とハンセン病 3 林力

部落差別の現実 41 教育と啓発 4 江嶋修作

**かわとはきもの 133** (東京都立皮革技術センター台東

## 事務局より

講座報告にもありますように、昨年10月から12月にかけて開催いたしました部落史連続講座を無事終了することができました。次号では第3回(吉田栄治郎さん講演)、第4回(八箇亮仁さん講演)の報告を掲載予定です。なお、2006年度も部落史講座を開催する予定になっています。テーマ等決まり次第、この通信やホームページ・メールマガジンでお知らせいたしますのでご期待ください。

□所在地 〒603-8151 京都市北区小山下総町5-1 京都府部落解放センター3階

□TEL/FAX 075-415-1032

□URL <http://www.asahi-net.or.jp/~qm8m-ndmt/>

□開室日時 月曜日～金曜日 第2・4土曜日 10時～17時(祝日・年末年始は休みます)

□交通機関 市営地下鉄烏丸線「鞍馬口」駅(京都駅より約10分)下車 北へ徒歩2分